「活性化」する空間 菅木志雄

「もの」と「場」をめぐる思考と実践から、独自の世界を提示してきた美術作家、菅木志雄(73)。昭和40年代に日本で生まれた芸術運動「もの派」の主導的メンバーであり、現在イタリアで開催中のベネチアビエンナーレ国際美術展にも参加。水面に約20メートルの細長いプラスチック板を浮かべ、その上に10個の石を配置した作品「状況律」を展示するなど、近年改めて世界で注目されているアーティストだ。

菅の主要な表現の一つに「アクティヴェイション(活性化)」がある。ある空間で、作家自身がさまざまなものを駆使し、ある状況をつくり出してゆく。物質が集まり、相互に連関が生まれ、空間全体が活性化…と説明を百回聞くよりは一見にしかず、だろう。5月21日、横浜美術館(横浜市西区)で行われた「アクティヴェイション」を見た。

舞台は丹下健三設計による同美術館の1階。御影石をふんだんに使った、天井高20メートルの吹き抜け空間だ。菅はおもむろに白いビニールシートを広げ、異なる深さに水を張ったバケツを4つ配置。それらをつなぐようにセロハンテープをピンと張ると、一気に空間に緊張感が生まれる。

使うものは事前に用意されているため、作家の頭にはおおよそのイメージはあるのだろうが、一瞬立ち止まり思案する場面も。シートの上に青いカーボン紙を置いたり、それらをこすって痕跡を残したり、石でバケツをたたいて音を空間に反響させたり…。その即興性、ライブ感覚が次第に見学客を引き込んでゆく。つまり見学客も、菅が操る物質と同様、その場を構成する要素の一部なのだ。

通常の創作では最終的に出来上がった形を作品と呼ぶが、「アクティヴェイションは『過程』を見せる表現」と柏木智雄副館長。アクティヴェイションは一回だけだが、同館では25日まで、菅の作品「散境」を展示している(木曜休)。また東京・六本木の小山登美夫ギャラリーでも10日まで、菅の個展「分けられた指空性」が開かれている(日・月曜休)。(黒沢綾子)

「アクティヴェイション」を行う菅木志雄(右)

国	作家	執筆者	文献タイトル	媒体名	発行日	頁	発行元	展覧会名
J	菅木志雄	黒沢綾子	「活性化」する空間 菅木志雄	産経新聞	2017年6月1日 木曜日	p.15	産経新聞社	